

未来への羅針盤

～ Apoptosis と Serendipity ～

日本レジャー・レクリエーション学会 (JSLRS)

会 長 鈴木 秀雄 (関東学院大学人間環境学部人間発達学科教授、Ph.D.)

レジャー・レクリエーション研究者や専門家の間であっても、また、巷間であっても、学会の共通言語であるレジャー・レクリエーションに対する概念理解や認識、既存のイメージ、捉え方は様々である。本来、レジャー・レクリエーションが一人ひとりの豊かさや幸福(感)を具現するのであれば、当然、個人が持つレジャー・レクリエーションに対するそれぞれの思いや行動も多岐・多様であることは論を待たない。それほどに広汎にわたる領域であるレジャー・レクリエーションの研究領域・専門領域、即ち、外延と内包を輕輕に限定し得るものでもない。しかしながら一方では、概念自体を曖昧模糊としたものであるとばかりに、ファジーのままに括っておきさえすればよいものでもない。

諸外国からの新しい概念の取り入れに関しては、日本の文化や事象にない事柄の表記に際して、当然、カタカナ表記がなされるが、レジャー・レクリエーションも同様の流れを有するものの、そのカタカナ言葉、即ち、日本における「レジャー・レクリエーション」から捉えられる意味は、必ずしもそれらの本質を正しく理解するに至っていない。このレジャー・レクリエーションに替わる新しい概念表記を新たなカタカナで表記することになれば混乱を呈することになる。そうであれば、旧態依然とした捉え方や考え方ではなく、自然界では細胞が予め遺伝子に組み込まれたプログラムに従って自然死するメカニズムであるアポトーシス (Apoptosis; 新生) を有するように、現行のレジャー・レクリエーションに関する新生も必要である。時代の流れ、進展とともに、社会の変遷もあり、旧態依然としたレジャー・レクリエーション(観)の概念理解では疾うに立ち行かなくなっている。

レジャー・レクリエーションの本質的な意味を表現する新たなカタカナ表記を創作すること (Coinage = 新造語) もままならないのであれば、レジャー・レクリエーションを正しく説明できる言葉を作り出しておくことも必要であろう。専門家として、研究者として、多くの異なる考え方があるところに研究の意義や必要性が存在する。レジャー・レクリエーションを説明するならば、一例として、「レジャー・レクリエーションは、日々に寄り添う、掛替えのない“とっておきの”楽しさおもしろさを求めて、豊かな“活動”、“生活”、“生き方”を紡ぎ出すこと」に他ならない。

自身の文化(活動、生活、生き方)を豊かにしていくための Apoptosis を具現化することにより、自身の考え方、また、研究の方法(方向性)に、時に、幸運な、あるいは思いがけない発見 (Serendipity) が誘われる。

学会も本年は第40回学会記念大会を迎えるが、今後は、学会の研究領域の全てを学会員の個人研究・共同研究にのみに委ねるのではなく、領域の広がりや研究活動が積極的あるいは十分でない領域、また、新たな領域や時代の要請に応える研究課題等にメスを入れ学会主導の研究共同プロジェクトの立ち上げ等も視野にいれ、応分の学会費を投入するなど一考すべきである。さらに言えば、多岐・多様にわたる学会員の研究領域からすれば、受託研究を積極的に受け入れる窓口作りと制度化も図るべきである。

高等教育機関における研究者の養成が難しいのであれば、むしろ関連領域大学院研究科との連携で、研究支援と共に、研究者養成の枠組み作りを構築すべきである。例えば、研究員(学会幹事)としての立場で研究活動と学会活動を並行してすすめ、研究科費用(学費)の一部補填はスカラシップ制などをもって学会から提供することも若手研究者の育成として考えられよう。そこに民間企業との共同企画としてのグラント制度を加えても意味あることである。そのことが委託・受託研究にも繋がっていく。そのためにも、関連領域の大学院研究科との学術的連携も視野に置くべきであろう。

学会活性化あるいは未来の羅針盤作りに向け、学会内に“中期計画の策定”や、“将来構想検討委員会”を立ち上げ、学会業務のルーティン処理に留まることなく、将来に向けた学会の動きを積極的に創りあげていくべきである。